

## ゼミレポート

# イスラーム主義—もう一つの近代を構想する

180781058 浅井賢太

イスラーム主義とは、イスラームに依拠した社会変革や国家建設を目指すイデオロギーである。これは、宗教としてのイスラームとは異なる意味を持つ。イスラームはクルアーンの教えを信じ、クルアーンには社会や国家のあるべき姿も示されている。イスラーム主義は信仰を根底に置きながらも、イスラームをイデオロギーとして選択するかどうか、他のイデオロギーと比較して選び取られるものである。イスラーム主義の目標は公的領域におけるイスラーム的価値の実現である。イスラームには解釈の余地のない信仰上の根幹があるため、具体的な価値を定義するのは難しい。イスラーム主義の実態を掴むためには政治と宗教のそれぞれが宙に浮かんだ状態を想定することになる。

イスラーム国家とは、イスラーム法によって統治される国家のことである。国民国家と違い、法が国民によって定められるものでなく、神の法を体現するために国家がつけられた。オスマン帝国はスルタンカリフが最高権力者で宗教権威であると国の内外に向けて主張した。しかし、西洋列強による分割・支配の拡大により、植民地国家へと変容した。植民地国家では、公的領域を西洋列強が担い、私的領域を中東の人々が担うことになった。つまり、国家の正しさを担保していたイスラームが政治的な役割を失っていったことになる。帝国崩壊後は、西洋的近代化の世俗主義か宗教に基づく国家の再編を目指すイスラーム主義なのか、あるべき秩序を模索することになった。

イスラームの力を甦らせるためにイスラーム改革が行われた。非イスラーム的なものを洗い出した。しかし、近代西洋からもたらされる新たな事物を非イスラーム的と安易に断じず、むしろ、寛容的な姿勢を見せた。それによってイスラーム的を改めて問い直そうとした。アフガーニーは近代西洋の思想や科学も突き詰めれば神の創造物であり、イスラームの教えと矛盾しないと説いた。アブドゥは『固き絆』でイスラームの教えと近代西洋の思想や科学は両立すると説き、中庸の道を歩んだ。アブドゥの思想は中庸的であるがゆえに異なるかたちで受け継がれ、分裂や混乱に直面した。このように、イスラーム主義は植民地主義の脅威や西洋的近代化の波がきっかけで生まれたと言える。

植民地主義と西洋的近代化によって、今までエリートしか読めなかった文字を一般人が読めるようになり、政治や政党に主体的に参加するようになった。こうして、エリートの

地位が低下し大衆社会が出現した。バンナーはイスラームに基づく社会変革と国家建設の必要性を説き、同胞団を結成した。同胞団は多岐にわたる活動を行い、自らの思想の普及に努めた。同胞団への参加を通して、善行を積んだり運動の傘下にある組織や企業に就職出来たり、現世と来世で二元的に利益を得られた。しかし、エジプト政府はイギリスの影響で西洋的近代化を進めておりイスラーム主義の同胞団を脅威と感じ、同胞団の解散・非合法化を決めた。その後、同胞団の武闘派が首相の暗殺、バンナーが秘密警察による暗殺が行われ、同胞団は反体制派の定位置を取るようになった。

1979年にホメイニー率いるイスラーム主義者たちがイラン・イスラーム革命を起こしたことにより、イスラーム復興の機運が高まった。ホメイニーはシーア派でイランのパフラヴィー朝は西洋的近代化を進めている点と世襲君主制が間違えているという点で革命の対象にした。ホメイニーの革命論では世界は抑圧者たちに支配されており、被抑圧者が連帯して立ち上がる必要があると謳った。革命後ホメイニーは選挙により、大統領となった。そして、ホメイニーはイスラーム共和制をとった。また、ホメイニーは以前のパフラヴィー朝がアメリカの傀儡国家でパレスチナの土地を占領していたためアメリカを抑圧者として激しく批判した。これに触発された若者たちが大使館立てこもり事件を起こした。この時期のイスラーム主義はナショナリズムに対するアンチテーゼとして存在した。

イラン・イスラーム革命以降、過激なイスラーム主義者は過激派と呼ばれた。しかし近年ではムスリムの偏見を避けるためジハード主義者という用語が使われるようになってきている。ジハード主義者はさまざまなかたちがあるジハードの中で特に武器を使って戦うことに固執するイスラーム主義者を指す。これまでムスリム同士の争いをタブーとされてきたが、クトゥブがムスリム同胞団を弾圧するナセル政権を絶対的な悪であると指揮したことが独り歩きし曲解された。これによりタクフィール主義（他者を不信仰者と断罪することで紙にしかできないことだが曲解し断罪した）を打ち出した。これをジハード主義者の第一世代と呼ぶ。第一世代はパレスチナ解放などムスリムが多数を占める国家での暴力を用いた世直しを行った。1980年代後半になると国内から国外へムスリム社会の不信仰者から非ムスリム社会の異教徒へと変わる。この特徴が第二世代である。第二世代ではウサマビンラディン率いるアルカイダがアメリカにテロを行ったように無差別な暴力に手を染めるようになった。これによりジョージブッシュ大統領は対テロ戦争の発動を宣言しテロリストを脅威とみなした。しかし、テロリストが誰なのか明確にしなかったため、アルカイダとイスラーム主義、イスラーム教そのものとの区別が十分にされないまま戦争へと突き進んだ。この対テロ戦争により、イスラーム主義者やムスリムがアルカイダの予備軍として偏見や差別や暴力の対象となった。その結果、皮肉にも世界各地にアルカイダの共感者を増やしてしまった。

9・11 事件から 10 年目の節目の年にアラブの春が起こった。アラブの春とはアラブ諸国における長年にわたる独裁政治に対して、人々が自由や民主主義を求めて立ち上がった一連の事件のことである。この事件により、人々はイスラーム主義を含む、様々な選択肢を自由に議論できるようになった。アラブの春を経て、イスラーム主義者はイスラーム政党を結成し民主政治へと参加していった。エジプトやチュニジアのイスラーム政党は第一政党となり勝利した。統計分析によるとイスラーム政党に投票した人の多くは政治に宗教をより多く反映することを重視していたことが分かった。つまり、今日の中東諸国において、イスラーム主義を支持する人々が多数存在することがあらためてあきらかになったのである。しかし、エジプトは社会や国家のイスラーム化を拙速に推し進めようとしたため反発を呼び各地で抗議デモが発生しわずか一年で失脚した。チュニジアも批判を呼んだが世俗主義勢力と妥協を図り、事実上宗教と切り離された市民国家となった。

アラブの春を経ても中東の人々は、独裁政治の下で暮らすか欧米諸国の顔色をうかがいながら条件付きの民主主義を運営するかの二択に迫られていたのである。この絶望の中でイスラーム国は西洋列強による植民地主義によって創造された中東を根本的に否定するアンチテーゼを示そうとし、勢力を急速に伸ばした。イスラーム国は暴力と不寛容を特徴とするジハード主義であった。西洋的近代化を進める独裁政権だけでなく、シーア派などの宗派まで敵視した。イスラームにおいて宗派主義は忌避されてきたが、今日の中東諸国では富や地位を巡る権力闘争が宗派の違いが争点となり、蔓延してしまっただけである。イスラーム国は、イスラーム国家の樹立やカリスマ的な指導者を持つという第一世代の要素と、アジアからアフリカにかけての広大なイスラーム国家の建設という第二世代的な要素を含み、第三世代と分類することができよう。イスラーム国の登場は中東の社会と国家をさらに荒廃させ、かつてない混乱の時代へと入っていった。

世界に今求められているのは、世俗主義であれ、イスラーム主義者であれ、様々な意見が等価と考え、対話を通して合意形成が実現されるような社会や国家を共に構成していく姿勢であろう。